

ずいそう

畑の土に学ぶこと

福田 誠一



週末休日には家内と二人で健康管理と食糧自給?を兼ねて、自宅から車で約1時間かけ郊外にある市民農園に出かけている。

10年前、「トマト・キュウリを作るくらいは簡単なものよ」と家内に豪語し、50m²余りの区画を借り上げて野菜作りなるものを始めた。本屋で家庭菜園の手引書を仕入れ、子供のころ他人事のように見ていた実家の農作業を思い出し、見様見真似に植付けてみると曲がりなりにも成育し、見栄えや味はともかく、まずは収穫できたことに夫婦共々感嘆し喜んだものである。

しかし、2~3年繰り返すうち同じ作付けをしても収穫成果にバラツキが出ることに気がつく。特に玉ネギが難しく、どうしても市場にあるような均一な玉ネギの形にはほど遠い出来なのである。原因を農園の管理人(地元の農業プロ)に尋ねてみると、「畑の土が野菜作りに馴染んでいないから」とのこと、何のことも判らず植付けの時期、施肥量、育苗管理など試行錯誤しながら年を重ねるうちに、今ではようやく10種類くらいの野菜はかなりコンスタントに収穫出来るようになってきた。特に初年に豪語宣言したトマト、キュウリは毎年背丈以上に昇り育ち、市場商品にはない格別の味を秘めた品が収穫出来るようになったのである。管理人から「上手になったねえ、見本農園生じゃ」と呼ばれるようになってきた。ようやく週1農業に見合う農園技術「畑の土作り」が身についたのであろうか。

しかし、まだ野菜作りで克服しなければならない多くの未解決事項がある。その一つが「無駄を省く農園技術」である。家族の消費量を超えた作付け量、種から育苗せずに高価な出来物苗を購入した植付け、適量を見越したバラマキ施肥量など余りにも無駄が多く、せっかく実ってくれた野菜に対して申し訳ないことである。しかも実ったキュウリは1本が百円以上にもなっているような気がする。

如何に趣味と実益を兼ねた家庭菜園とはいえ、プロ技術を持った管理人から見れば情けなく許し難いことであり、「上手になったねえ」との誉め言葉は単なるお世辞であり、裏を返した称号は「見本的無駄農園

生?」になるのかもしれない。

そういえば40歳代のころ「技術力とは…」について職場で議論したことがある。様々な意見を集約すると、技術力とは「適確な判断が出来る能力」、これこそが技術者に必要と言うのである。

私には技術力について一言で論ずる知識能力はないが自己流に表現してみると、組織としての技術力をいうならば「過去から養われた技術と経験を結集し、常に向上精神を持ってPDCAを廻し、組織一体となって取り組む能力」ではなかろうか。

一方、個々人では様々な分野と立場があり、技術の資質は異なって当然であるが「組織」の表現を除けば考え方は同じであろう。

大事なことは局面毎での方向性について次なる行動を素早く判断出来るかどうかである。「困った、弱った、どうするか…」ではいつまで経っても前に進めず、また周囲にも迷惑をかけることになる。このことが「適確なる判断力」の議論に繋がるのであろう。

我々が携わる建設産業は、数多くの資機材と施工技術を駆使し、現地に見合う一品目的物を構築する「総合組立業」である。携わる技術者には「品質を確保し、経済的に、安全に、環境に配慮し、期限内に完成させる」ことが求められる。昔からよく言われている「より良く、より安く、より早く、より安全に」なるよう「適切に管理する技術力」が必要であり、このことは私の抱える農園の課題「無駄を省く農園技術」にも通ずるものがある。

今週末も市民農園に出掛ける予定でいる。この歳になると炎天下での汗にまみれた鍬使いは辛い作業であるが、赤く実ったトマトを見れば労苦が報われる喜びがある。

週末に一度の農園通い、あわよくば「土日に必ず熟実する菜園技術?」に出会ってみたい。